

第5章 畿内における靱形埴輪の変遷 ——埴輪に描かれた鍬と実物の鍬——

1 はじめに

今回の待兼山遺跡の調査で出土した靱形埴輪はいずれも断片であり、全体の形を推しはかることは困難であるが、幸いにも鍬および肩かけ紐と思われる部分の破片が含まれており、ある程度の特徴を把握することができる。本論では、まず第1節で、畿内出土の靱形埴輪の時期的変遷を概観し、第2節では靱形埴輪に描かれた鍬と実物の鍬との形態を時期ごとに比較することによって靱形埴輪の表現法の特徴の一端に迫りたい。さらに第3節では、当遺跡出土の資料が、畿内の靱形埴輪のなかでいかなる位置を占めるのかを検討し、合わせて線刻技法の観察などを通じて、当例の個体的特徴を考察したい。

2 靱形埴輪の編年的考察

靱形埴輪の編年的考察は、他の形象埴輪と同様、従来あまり試みられたことがなかったが、近年、勝部明生氏がその大局的な見通しを呈示した⁽¹⁾。勝部氏によれば、古墳時代前期後半から中期中葉にかけての靱形埴輪は実物の靱を正確に写実したものであるが、それ以降は小型化と施文の簡略化がみられ、後期に入ると矢筒や鍬の表現さえ欠落した形態、すなわち従来石見型盾形埴輪と称されてきたものに变化するという。そしてそのことは、古墳祭祀の変化による器材埴輪の形骸化を示すものだとする。また、川村紀子氏は、古市古墳群内の埴輪を詳細に検討した結果、靱形埴輪については時期が下るにつれて小型化と文様の簡略化が認められることを指摘している⁽²⁾。両氏の見解は、従来から形象埴輪一般について指摘されていた、写実的なものから簡略化したものへという大きなプロセスを、靱形埴輪を材料に具体化したという点で傾聴に値する。ただし、両氏の論考は、靱形埴輪自体の細分編年の確立を直接意図したものではなかった。ことに勝部氏は、畿内において靱形埴輪が盛行する前期後葉から中期にかけての細分編年を、資料的な不充分さを理由に、意識的に差し控えている。しかし、視点をより細かくして、鍬部及びその周辺部の表現方法に限って検討してみると、かなりの多様性がみられ、なお細分できる可能性がある。

さて、初現期に近いと考えられる靱形埴輪の資料のうち、鍬部周辺の形状を知りうるものとしては、奈良県御所市宮山古墳⁽⁴⁾および京都府宇治市庵寺山古墳⁽⁵⁾の例がある。宮山古墳には数個体の資料があるが、最も残りのよい1号靱形埴輪(図20-1)は、矢を容れる断面長方形の筥部と、その背後につく板状の背負革をかたどった部分から成る。直弧文を刻んだ筥部の上端部の上面と側面に、鍬を浮き彫り状に表現する。筥部の両側、鍬の下端部あたりから浮き彫り状に

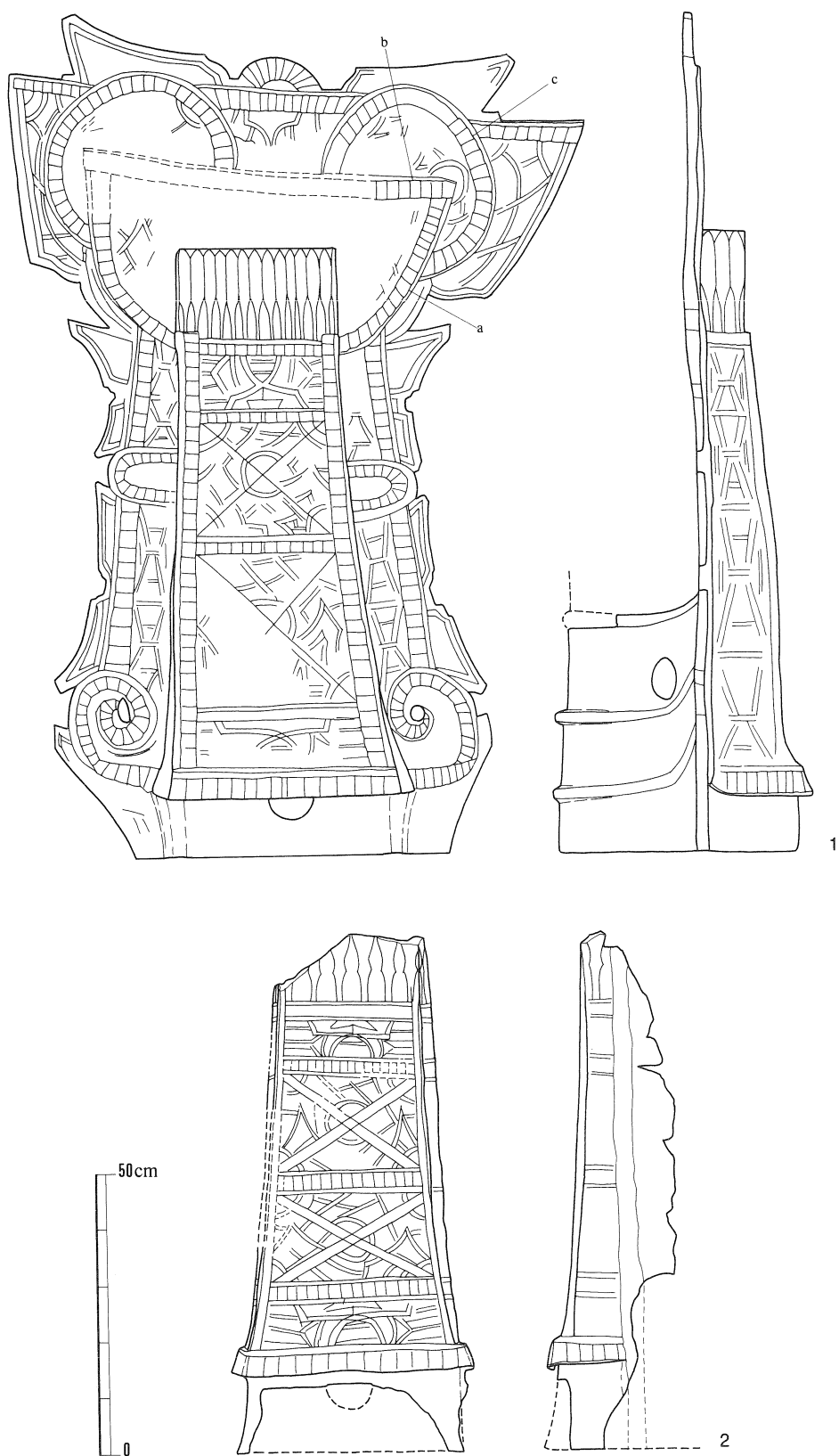


図20 畿内出土の靱形埴輪(1) 1 宮山, 2 茶山1号 注(4)、(13)文献より再トレース

刻んだ梯子状の弧線(図中a)が斜め上方に立ち上がる。この弧線は勝部氏の⁽⁶⁾指摘通り、筥と板状の背負革(以下、「背負板」と称す)とを固着するための皮紐を表現したものであろう。この梯子状弧線の上端は、左右それぞれ、直線的に横走する梯子状の線bの両端につながるものとみられる。さらに、その部分を囲むように取りつく円弧cは、肩かけ紐の表現であると考えられるので、この梯子状の横線は背負板の上辺を表わしたものと推測される。なお、筥部の中央部と下端部のそれぞれ両側にも、筥と背負板を結びつける皮紐の表現が認められる。宮山古墳2号靱形埴輪は、背負板の上半部を欠失するが、下半部および筥の表現は、1号とほぼ同様である。

次に庵寺山古墳の例をみると、これも宮山古墳の例と同様、断面長方形の筥部とその背後につく背負板の部分から構成されており、鏝は筥部の上面に半ば浮き彫り状に描かれる。背負板の上半部は欠損しており形状は不明であるが、下端部には宮山例と同じく皮紐の表現がみられる。ただし、宮山例の皮紐が梯子状のモチーフを利用して表現されているのに対し、この例では単純な二重の円弧として描かれており、間を埋める短線群は認められない。

中期前葉に属する例は現状では明らかでないが、中葉の例としては大阪府羽曳野市墓山古墳⁽⁷⁾の資料がある。これも直弧文を刻んだ筥部の上面に鏝を描くという点では宮山・庵寺山両例と同様であるが、鏝の表現法が浮き彫り状ではなく、線刻によっている点が異なる。背負板については不明である。この墓山古墳の陪塚と考えられている同市野中古墳⁽⁸⁾の例(図21-8)は、以上にみてきた諸例とは大きく異なった要素を持つ。すなわち、以上の諸例がいずれも筥部の上面に鏝を描いているのに対して、野中例では、背負板と同一平面上に鏝を描く。鏝は線刻で表現する。筥部は欠失しており不明であるが、筥と背負板を結ぶ皮紐(図中a)および肩かけ紐cの表現は宮山例とほぼ同一である。ただし、梯子状のモチーフは浮き彫り状ではなく線刻であり、背負板の上辺を表わす横線bと皮紐aの接点の表現は、宮山例に比べて省略がみられる。また、宮山例において肩かけ紐の周囲に刻まれる直弧文は、この例では著しく退化している。ほぼ同時期とされている大阪市長原遺跡⁽⁹⁾の例でも、背負板と同一平面上に、鏝を線刻で表現している。

中期後葉の資料としては、大阪府美原町黒姫山古墳⁽¹⁰⁾、同堺市翁橋遺跡などの例がある。黒姫山古墳の例(図21-1)は、鏝を背負板と同一平面上に線刻で表わす点では野中、長原両例と同様であるが、周囲の表現法に差異が認められる。すなわち、野中例では梯子状のモチーフによって表わされた皮紐と背負板上辺が鏝部を取り囲み、その両肩に同じモチーフの肩かけ紐が取りつくのに対して、黒姫山例では、鏝部を単純な二重線で矩形に囲む(図中a)。この二重の矩線は筥と背負板を結びつける皮紐の表現としては不自然であり、むしろ筥の裏板の縁取りの表現と考えた方が理解しやすい。そのように考えると、肩かけ紐や筥と背負板を結ぶ皮紐の表現として候補に上がるのは、鏝部の左側から立ち上がる蕨手状の重弧線bおよび矩線の角から斜め上方に伸びる二重の直線cである。前者bは完結せず、背負板に穿たれた円孔につながってい

ることから、肩かけ紐と考えるよりも、筥と背負板を結ぶ皮紐とみなす方が妥当であろう。その形状が宮山例における筥部下端両側の皮紐の表現と共通することも、この推測を支持するに足る。後者cは、黒姫山例と同じく鍔部を二重の矩線で囲む翁橋遺跡の例(図21-6)および大阪府藤井寺市国府遺跡出土例(図21-5)⁽¹²⁾にも認められる。この斜め上方に伸びる二重線が何を表現しているのかは不明であるが、筥の裏板の上辺の角と考えられる位置に取りついていることから、やはり筥と背負板を結ぶ何らかの付属物を表わしている可能性が高い。いずれにせよ黒姫山、翁橋、国府の3例における鍔部周辺の表現形態は基本的に同一であり、野中例とは趣を異にしている。このタイプの靱形埴輪における肩かけ紐の表現は、断片的な資料が多いため明確でないが、最も残りのよい黒姫山例に限っていえば、欠落している可能性がある。

次に、細かい時期の確定はできないが、良好な資料と思われる例について検討しておきたい。まず大阪府羽曳野市茶山1号墳の3例⁽¹³⁾がある。伴出した円筒埴輪は前期中葉から後期までの時期幅を持つと報告されている。このうち筥部のみ遺存する個体(図20-2)は、筥部の上面と側面に線刻で鍔を描く。筥部の直弧文は宮山例に比べて若干の退化がみられるが大きな崩れはなく、宮山例よりも後出であるが時期的に著しい隔たりはないと考えて大過なからう。前面に大きな黒斑を有する点もこの推測を支持する。また、筥部上端と背負板を残す個体(図21-4)は、上の例と異なり背負板と同一平面上に線刻で鍔を表現する。鍔部を矩形に囲む線がみられるのは黒姫山例などと共通する点であるが、これに梯子状のモチーフを用いる点と、矩形の上辺中央部から梯子状の刻線が垂直に立ち上がる点は黒姫山例などと異なる。この立ち上がりの延長上にはおそらく長方形のくりこみがあり、筥と背負板を結びつける何かを表現している可能性がある。矩形の角に肩かけ紐を表現する円弧は取りついていない。比較的多くの部分が遺存するにもかかわらず黒斑が認められないということから、中期中葉に上限を置くことができよう。さらに、上半部を残す個体(図21-2)は、鍔の表現を欠く点で特異である。しかし、本来鍔が描かれるべき空白は、背負板と同一平面上にある。鍔部の周囲の表現は野中例とほぼ同様である。当例も黒斑を持たず、上限は中期中葉に置かれよう。次に京都大学蔵の大阪府羽曳野市誉田白鳥遺跡の例(図21-7)⁽¹⁴⁾をみると、これも背負板と同一平面上に鍔が線刻で描かれる。鍔部を黒姫山例と同じ単純な二重の矩線で囲むが、その両角に梯子状モチーフによる円弧を取りつけ、肩かけ紐を表現する点では野中例と共通する。最後に、奈良県高取町市尾今田2号墳の例⁽¹⁵⁾は、筥部上面に鍔を線刻で描く。中期の中葉に属するか後葉まで下るか、確固たる判断がつかない。⁽¹⁶⁾

以上のことを整理すると、まず靱形埴輪は鍔を表現する位置によって大きく二つに分類できる。その一は、筥部の上面に鍔を描くものである。これをI式とする。I式の実例としては宮山古墳(図20-1)、庵寺山古墳、墓山古墳、茶山1号墳(図20-2)、および今田2号墳の資料がある。宮山例を最も古く、墓山例を最も新しいものと考え、I式はおおむね前期末頃か

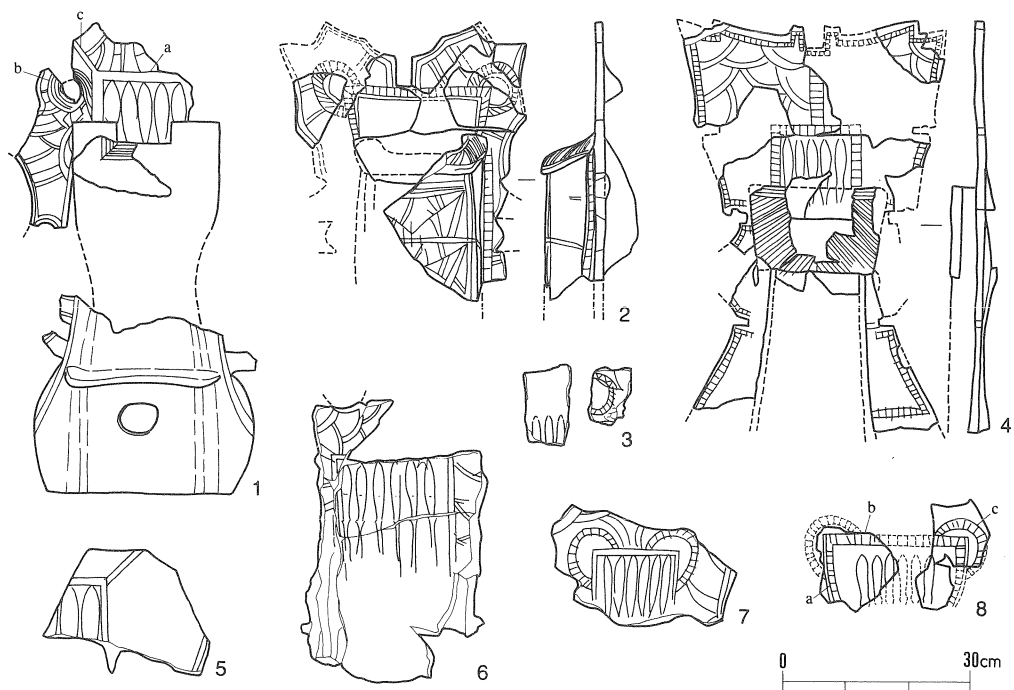


図21 畿内出土の靱形埴輪(2)

1 黒姫山, 2・4 茶山1号, 3 待兼山, 5 国府, 6 翁橋, 7 菅田白鳥, 8 野中
 注(7)、(8)、(10)、(11)、(13)文献より再トレース 5、7は写真トレースのため誤差あり

ら中期中葉頃の時期におこなわれた型式とみなすことができる。Ⅰ式は大型で、精緻な直弧文で飾られるのが普通である。⁽¹⁷⁾この型式のうちには、宮山、庵寺山両例のように多数の鋸を浮き彫り状に表現するものと、墓山、茶山両例のように5～7本の鋸を線刻で表現するものがあり、各例の所属時期からみて前者の方が古い様相をとどめるものと考えられる。⁽¹⁸⁾

その二は、鋸を背負板と同一平面上に描くものである。これをⅡ式としたい。Ⅱ式のうち最も時期がさかのぼると考えられるのは、中期中葉に属する野中古墳の例である。Ⅱ式の靱形埴輪は、畿内においては明確に後期に下る例が現状では認められず、所属例の多い中期後葉における盛行の後には急速に衰退すると考えられる。この型式に属する例は、いずれも概して小ぶりで、5～6本の鋸を線刻で表現している。刻まれた直弧文は退化が著しく、単に弧線を鱗状に重ねている例がしばしばみうけられる。Ⅱ式をさらに細分すると、鋸部を半円形に囲む刻線の両角に円弧状の肩かけ紐を描き、梯子状のモチーフを多用する野中タイプと、鋸部を二重の刻線で矩形に囲み、その角から斜め上方に二重の直線が伸びる黒姫山タイプとの存在を指摘することができる。この両者の先後関係は現状では押えることができず、むしろ系譜を異にするものである可能性が高い。そのように考えると、野中タイプの中では最も時期的にさかのぼるとみられる野中古墳の例において、鋸の周囲の表現法が宮山例に類似することから、このタイプの系譜的祖型をⅠ式の宮山例を代表とするものに求めうる可能性が高い。黒姫山タイプの祖型

となりうる例は、現状では指摘することができないが、かたどったものと靱の型式が野中例のそれと異なっていたことも考えておかなければならない。

なお、野中・黒姫山両タイプの中間的な特徴を有するものもある。誉田白鳥例は、先にも述べたように、鏃部を囲む矩形は黒姫山例と共通するが、肩かけ紐の表現は野中例と類似する。鏃部を囲む矩形は箭の裏板の縁取りの表現とするにふさわしいが、そうだとすると箭に直接肩かけ紐がついていることになる。さらに、その周囲の弧文を刻んだ部分が背負板に当たるとすれば、実物の靱の形態から考えて矛盾に満ちた表現といえる。また、茶山1号墳の例のうち図21-4の個体は、梯子状のモチーフを用いる点では野中例と共通し、鏃部を囲む刻線が矩形をなす点は黒姫山例と類似するが、矩形の上辺中央から垂直に立ち上がる刻線は他に類例をみない。さらに背負板の外形が他の例と異なり石見型盾形埴輪の外形と酷似するという点も独自のである。したがって当例は、これまでみてきたものとはまた別の系譜に属する可能性もある。畿内の靱形埴輪が後期に入ると石見型盾形埴輪に受け継がれるという勝部氏の見解に従えば、当例は後期への傾斜を示すものとして興味深い。










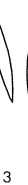








本節で考察した畿内の靱形埴輪の変遷と系譜の問題については、資料の増加を待ってなお補足、修正すべき点が多々あろう。しかし、少なくともⅠ式からⅡ式へという大づかみな変化を指摘することは、現状でもある程度許されるであろう。

3 靱形埴輪に表現された鏃の形態

本節では、視点をより細かくして、靱形埴輪に表現された鏃の形態を実物の鏃と時期ごとに比較することによってその特質を把握したい。その概要を表1に示した。

まず、Ⅰ式でも古相を呈すると考えた宮山古墳の諸例には、3種類の鏃の表現がみられる。その第一(表1右半部-2)は、最も残りのよい1号靱形埴輪に描かれた柳葉式の鏃で、両側縁がほぼ直線的に平行し、比較的明瞭な関部を有する。この型式の鉄鏃(表1左半部-ⅠBa, 図22-1, 2)は、都出比呂志氏による前期古墳4分期案のうちⅢ期に属するとされる静岡県磐田市松林山古墳⁽²¹⁾、同清水市三池平古墳⁽²²⁾および畿内では奈良県桜井市メスリ山古墳⁽²³⁾の鉄製矢の鏃部などにみられる。きわめて大型で稜を持たないのが普通である。Ⅲ期には普遍的な型式と考えられるが、次のⅣ期から中期にかけては主流でなくなり、後期には、畿内ではきわめて稀になる。第二(表1右半部-4)は、同じ柳葉式であるが、最大幅部位が先端寄りにあり、側縁は緩いS字状を呈し、わずかに突出する関部を経て緩やかに茎部へ続く。この型式の鉄鏃(表1左半部-ⅠBb, 図22-3, 4)は、しばしば鳥舌形と称されるもので、鏃身下半部の断面形が偏平な長方形を呈する場合が多い。Ⅳ期の大阪府和泉市黄金塚古墳の東槨⁽²⁴⁾の例をほぼ初現とし、中期前葉から中葉にかけて普通にみられるが、中葉のうちでもより新しい、いわゆる長頸式鉄鏃(ⅡB)が定着しはじめる段階になると衰退し、後葉になると畿内ではほとんど例をみない。第

表1 靱形埴輪に描かれた鏃と実物の鏃の時期的対応関係

時期	古墳名	I 断面方形の 頸部を有さない		II 断面方形の 頸部を有す				靱形埴輪に描かれた鏃の形態	
		A	B 無稜	A 短頸	B 長頸				
		有稜	a b	a b c	a b				
									
前期	南原	○							
	三池平	○	○		○				
	松林山	○	○						
	メスリ山(鉄製矢)		○						
	和泉黄金塚東櫛			○		○			
中葉	長良龍門寺			○					
	会津大塚山南棺	○				○			
	同 北棺	○				○			
前期	豊中大塚第1主体			○					
	同 第2主体			○		○			
	備後亀山1号					○	○		
中期	山城恵解山			○					
	アリ山		○			○	○		
	七観山			○		○	○		
	五条猫塚			○		○	○		
後葉	新沢139号			○					
	野中		○			○			
	新開1号					○	○		
後期	百舌鳥76号		○						
	御獅子塚								
	カトンボ山								
	黒姫山								
	八尾寺1号						○		

1 庵寺山, 2~4 宮山, 5・12 茶山1号, 6 墓山, 7 今田2号, 8 野中, 9 長原, 10 黒姫山, 11 翁橋, 13 萱田白鳥、
14 待兼山 鉄鏃分類ⅠAはいわゆる銅鏃形鉄鏃で、定角式、鑿頭式を含む。ⅡBaは細根の長頸式鉄鏃で、
片刃および短小な逆刺をもつものを含む

三(表1右半部-3)は、短い頸部(筥被)を有する腸袂式の鏃か、あるいは短い茎部のついた、頸部をもたない腸袂式の鏃に矢柄を装着した状態を表現したものと考えられる。前者の型式の鉄鏃(表1左半部-ⅡA b, 図22-7~9)は、頸部の断面形が方形を呈するのが特徴である。その最も古い例の一つは、都出氏による前期Ⅱ期に属する京都府向日市寺戸大塚古墳⁽²⁵⁾にみられ、Ⅲ期の三池平古墳のもの(図22-8)もほぼ同様の形態を持つ。Ⅳ期以降は頸部の断面形が正方形に近づくと同時に、頸部の伸長化、逆刺の発達が始まり、中期中葉頃からいわゆる平根型の長頸式鉄鏃として定形化していくと考えられる⁽²⁶⁾。後者の型式の鉄鏃(図22-10)は、弥生時代から⁽²⁷⁾たどれるが、畿内では前期末頃から中期中葉にかけて、とくに盛行をみる。さらに庵寺山古墳の例に表現された鏃(表1右半部-1)は、小さいスカート状の頸部をもつ短い柳葉式である。これは銅鏃あるいは銅鏃形鉄鏃にみられる形態(ⅠA a)である。後者は畿内ではほぼ前期Ⅱ期

までに限られるが、前者はIV期までは確実に残っている。

次に、I式のうち、鏃を線刻で表現するものについて見てみよう。まず、墓山古墳の例(表1右半部-6)は、二段の逆刺を有する腸袂式である。この種の鉄鏃(表1左半部-II A c, 図22-5, 6)は、黄金塚古墳東櫛の例をほぼ初現とし、中期中葉までみられる。また、茶山1号墳の例(表1右半部-5)は、先端部を欠くが、宮山例の第二の型式4と同様、鳥舌形の柳葉式鉄鏃(表1左半部-I B b, 図22-3, 4)の表現であることは確実である。今田2号墳の例(表1右半部-7)もまた同様である。

以上にみてきたI式の靱形埴輪に表現された鏃の形態は、数種類にわたるが、いずれもI式の存続時期である前期後葉から中期中葉にかけての代表的な実物の鏃の形態と一致する。浮き彫りの表現から線刻表現へという変化はあるが、後者でさえその筆致は丁寧である。前節でみた鏃部の周囲の表現方法と同様、実物の靱の模写という点で、まだ著しい崩れは認められない。

次にII式の靱形埴輪の鏃の表現を見てみたい。II式のなかでは時期的にさかのぼると考えられる野中古墳の例(表1右半部-8)は、関部を突出させるという特徴から、鳥舌形の柳葉式鉄鏃(表1左半部-I B b, 図22-3, 4)を表現したものと考えられる。しかし、両側縁を表わす二本の刻線が先端できちんとつながっていない箇所があったり、関部の突出の表現が不自然であるなど、同種の鏃を描くI式の茶山1号例(表1右半部-5)に比べて表現上の退化がみうけ

られる。翁橋(表1右半部-11)、茶山1号(同12)の両例も同種の鉄鏃を表現するものであるが、野中例以上の退化、省略が認められる。黒姫山古墳の例(表1左半部-10)は、同じく柳葉式の鏃を表現するものであるが、側縁は典型的な鳥舌形のような緩いS字状にはならず、単純に外弯している。このような形態の柳葉式鉄鏃は弥生時代には一般的であるが、古墳時代にはごく初期を除いてほとんど類例をみない。したがって、鳥舌形の柳葉式鉄鏃(表1左半部-I B b)もしくは宮山例に表現された側縁が直線的に平行する柳葉式鉄鏃(同I B a)の退化した表現とみなすのが妥当であろう。長原例の表現(表1右半部-9)も、小型ではあるがこれに近い。嘗

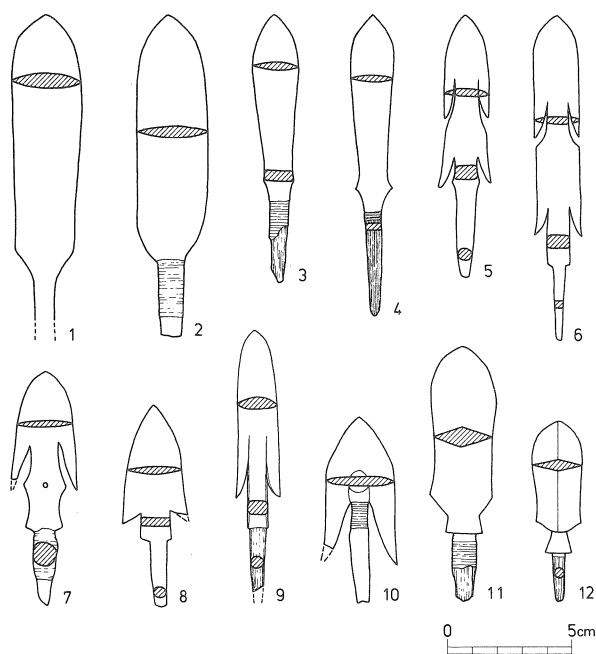


図22 鏃の諸型式

1 メスリ山(鉄製矢), 2 松林山, 3・5・10 和泉黄金塚東櫛, 4・6 五条猫塚, 7 会津大塚山南棺, 8 三池平, 9 野中, 11 桜井茶臼山, 12 森尾(銅鏃)
注(8)、(21)~(24)文献、その他参考文献より再トレース

田白鳥例は、表現が著しく崩れ、柳葉式の鏃を描いたものであるということがわかる程度である。当例は前節で指摘したように、鏃部の周囲の表現にも矛盾がみられ、Ⅱ式の靱形埴輪のなかでも、とくに表現上の退化が進んだものと捉えうる。

以上のように、Ⅱ式の靱形埴輪に表現された鏃の形態は、一種類ないし二種類に限定される。この種の柳葉式鉄鏃は、先にも述べたように、中期中葉でも長頸式鉄鏃が定着しはじめる段階になると次第に衰退し、後葉以降にはほとんど類例をみなくなる。したがって、Ⅱ式の存続時期である中期中葉から後葉にかけては、すでに主流の地位を失っているか、ほぼ消滅している型式であるということが出来る。このような型式の鉄鏃が、Ⅱ式の靱形埴輪において最後まで表現され続けている点は重要である。黒姫山古墳の実物の鉄鏃がすべて長頸式であるにもかかわらず、そこに樹立された靱形埴輪に柳葉式鉄鏃が描かれていることは、その端的な例である。さらに、Ⅱ式の靱形埴輪に線刻された鏃の筆致は一般に粗雑である。

Ⅰ式、Ⅱ式それぞれにおける鏃の表現形態を検討してきた。その結果、Ⅰ式の靱形埴輪は、同時期に現存した実物の鏃を浮き彫りまたは丁寧な線刻で表現しているが、Ⅱ式の靱形埴輪は、実際には衰退の途にあるかすでに消滅した型式の鏃のうち、限られた種類のものを線刻で表現しており、その手法は一般に退化、粗雑化が認められるという傾向がある。前節でみたⅠ式からⅡ式への変化は、鏃を描く位置を箭の上面から背負板の面へ移し、その本数も減らすという簡略化の過程と捉えうるが、本節での検討によって、それと同時に鏃の表現自体にも簡略化と写実的表現からの逸脱が進行することを、見て取ることができた。

4 待兼山遺跡の靱形埴輪

編年上、系譜上の位置 前節では、畿内出土の靱形埴輪を対象に、主として鏃部周辺の表現方法に視座をすえてその変遷と系譜を考えた。本節では、まず、待兼山遺跡出土の靱形埴輪(図21-3, 図8)が、そのなかでいかなる位置を占めるのかを検討したい。

はじめに鏃部周辺の形態から、これがⅠ式に属するものかⅡ式に属するものかを考えたい。その際に最も問題となるのは、本報告書の第2章でも指摘したように、鏃部の上方に何らの区画線も見当たらないという点である。前節で検討したⅡ式の諸例は、いずれも梯子状のモチーフか二重線で、鏃部を矩形または半円形に囲んでいる。したがって、当例がⅡ式に属するものであれば、鏃部の上方に、その上辺となるべき横方向の区画線が存在するのが普通であるが、そうした表現は認められず、鏃の先端から約7cm上方で、直接、生きた端面に達する。この面は、つぶさに観察すると、わずかに内弯しており、さらに現在は折損しているが、かつては右端に突起がついていた形跡がみられる。通常、靱形埴輪の背負板の外辺はほとんど直線状にならず、内弯したり、鰭飾りの突起がついたりする。そのように考えると、この面は背負板の外辺の一部とみなすのが妥当であろう。したがって、やはり当例は、背負板と同一平面上に鏃を

描くⅡ式に属すると判断される。Ⅱ式だとすれば、鋸部を囲む区画線の、少なくとも上辺を欠いた特異な例となる。

そのことについて吟味する前に、鋸の表現と肩かけ紐と思われる梯子状モチーフの円弧について検討しておきたい。まず鋸は、柳葉式に属する。側縁は直線的だが、やや下開き気味である。これと全く同一の形態を呈する例はないが、下開き気味である点に留意すると、関部は左右に突出することが考えられ、鳥舌形の柳葉式鉄鋸(表1 左半部－I B b)の退化した表現である可能性がある。次に梯子状モチーフの円弧は、野中例などの肩かけ紐の表現に類似する。しかし、肩かけ紐であるとすれば、これが取りつくべき区画線が認められず、判断に窮する。肩かけ紐であれば鋸部と近い場所に来ることが推測されるが、それにしても裏面の調整技法や突帯の形状があまりにも異なる点が気になる。したがって、本報告書の第2章でも推測したように、筒部の中位や下位に取りつく皮紐の表現である可能性もある。

待兼山遺跡の靱形埴輪について検討を重ねた。不明な点や不確実な点が多いが、現状では、鋸を表現する位置が背負板と同一平面上にあると考えるのが最も合理的である点や、柳葉式の鋸を粗雑に描いている点からⅡ式に属するものと判断しうる。伴出した円筒埴輪の多くが中期後葉に属するとみられる点から、当例もまたこの時期の所産であると考えられるが、このことは前節で考察したⅡ式の存続時期と矛盾しない。

系譜の点に関しては、すでにほとんど使われなくなっていた柳葉式鉄鋸を表現していることから、古市、百舌鳥両古墳群周辺に集中するⅡ式靱形埴輪と共通する要素を持っているといえる。また、梯子状モチーフを用いた円弧の表現がみられることは、前節で検討した野中タイプとのつながりを示している。しかし、鋸部を囲む区画線がみられないことは、当例の独自の要素であると同時に、鋸の表現形態ともあいまって、Ⅱ式のなかでもとくに退化した様相を呈していると判断して差しつかえないであろう。そのことはまた、当例の所属時期である中期後葉が、Ⅱ式靱形埴輪の存在時期のなかでも後半に当たることと関連すると思われる。

線刻技法の観察 前項で、待兼山遺跡の靱形埴輪が編年上、また系譜上、いかなる位置を占めるかを検討した。本項では、観察をより細部に及ぼし、鋸および梯子状モチーフの円弧を線刻した「筆跡」を分析し、実見することのできた野中古墳、茶山1号墳の例と比較することによって、本例の個体的特徴を抽出したい。

まず、鋸を描いた筆跡をみてみよう。待兼山例の現存部分には3本の鋸が描かれている。左と中央のものは両側縁を先端部から下部に向かってそれぞれ1本ずつの刻線で表現しているが、この2本の線が先端できちんとつながっておらず、その空隙を補うように短い線でつないだ形跡がみられる。ことに左のものは先端部の尖りを意識して山形の線を刻んでいる。右のものは両側縁の線が先端部でうまくつながっているにもかかわらず、左や中央のものと同じように、第3筆目を先端部のすぐ右上に浅く小さく刻んでいる。このことから、この靱形埴輪の製

作者は、先端部にたまたま生じた空隙を埋めたというよりも、鋳を3筆で描くというくせを持っていると考えた方が理解しやすい。また、3つの鋳とも左の側縁より右の側縁のほうが、線刻が深く鋭い。通常、右利きの場合、上から左下へおろす線よりも、上から右下へおろす線のほうが自然に力が入りやすい。したがって、製作者はおそらく右利きであつただろうと推測される。一方、野中古墳の例(図21-8)および茶山1号墳のうち図21-4の例は、鋳の両側縁を先端部から下方へそれぞれ1本ずつの線で描いている点は同様であるが、先端部がきちんとつながらなくても、それを補う線を入れないまま放置している。つまり、この両例の製作者たちは、鋳を2筆で描くという手法を持っている。両側縁の線刻の深さの差は、野中例では認められないが、茶山1号墳のうち最も右側の鋳は、左より右の側縁の線刻が深い。

次に、梯子状モチーフの円弧の表現をみたい。待兼山、野中、および茶山1号墳の図21-2の個体は、いずれも二重の円のあいだにそれとほぼ直交する短線を並べるという点では同じである。しかし、野中、茶山1号の両例では、二重円に直交する短線群がすべてほぼ平行するとみられるのに対し、待兼山例では、一部平行せず、W字状に並んでいる。前節でみた諸例のうち、梯子状モチーフの円弧のもつ例は、すべてほぼ平行させて描いており、一部W字状に並べるのは待兼山例の大きな個体的特徴であるといえる。さらに、これらの筆跡をみると、待兼山例では、W字状に並べた部分では円弧の外側から内側、内側から外側、外側から内側という手順で、ジグザグに刻み、平行する部分では内側から外側へと刻んでいる。野中例では、確認できる部分においては円弧の外側から内側へと刻んでいる。茶山1号墳では、それと反対に、内側から外側へと放射状に刻んでいる。梯子状モチーフの円弧については、以上のように三者三様の個性を持っている。

以上の観察結果から、すぐにある結論が得られるというわけではない。しかし、つぶさに観察すれば、同様のモチーフを描いても、そこに製作者の個性が表出されていることがわかる。かつて小林行雄氏は、人物埴輪の作風から個々の製作者の問題に迫ったが⁽²⁹⁾、靱形埴輪を含む形象埴輪一般についても、今後こうした観点からの詳細な検討が必要となつてこよう。

5 ま と め

本論では、畿内出土の靱形埴輪についての編年的考察を試み、とくにそこに描かれた鋳と実物の鋳との形態を比較、検討した。また、待兼山遺跡出土の資料がそのなかにおいて占める位置を考察し、合わせて線刻技法の観察を通じて、当例の個体的特徴、すなわち製作者の個性がいかなる形態で発露されているかを捉えようと試みた。

編年的考察については、今回は鋳部とその周囲の表現方法を中心に試みたが、将来、全体的な形状、施文の形態、調整も含めた製作技法などの検討を通じて、多面的に補足、修正していく必要がある。しかし、実物の鋳を筭部の上面に写實的に表現し、全体の大きさも実物の靱に

近いⅠ式から、すでに衰退の途にあるか消滅している型式の鋹を背負板と同一平面上に粗雑な線刻で描いた小型のⅡ式へという変遷を捉えるということは可能であろう。形象埴輪が写実的なものから象徴的なものへと変化していくことは従来から指摘されているが、⁽³⁰⁾本論で考察した靱形埴輪の変化も、これと齟齬するものではない。形象埴輪のかかる変化の背景について、小林行雄氏は、「あるものの形を正しく作って、古墳に立てる、という敬虔さから、比率に拘泥せずに、むしろ象徴的に輪郭をとらえたものを作ればよい、という態度への移行」を想定している。⁽³¹⁾また、勝部明生氏は、形象埴輪の変化の裏に、古墳祭祀の変化に伴う埴輪自体の意義の質的な変化を読み取っている。⁽³²⁾

靱形埴輪が写実性を失う過程でとくに重視すべき点は、Ⅱ式靱形埴輪にみられる鋹の表現がきわめて画一的であることと、この形態の鋹が実際には衰退しつつあるか、すでにほとんど使われなくなっていることである。このことは、著しい小型化や、鋹部周辺の表現方法および施文の退化、省略とあいまって、Ⅱ式靱形埴輪がもはや実物の靱やそれに立て並べた鋹ではなく、それ以前に製作されていた靱形埴輪を直接のモデルとして製作されたことを反映すると考えられる。かつて上田宏範氏は、畿内の形象埴輪にみられる表現の斉一性に着目し、その背景として量産体制に伴う規格の統一化を想定したが、⁽³³⁾Ⅱ式靱形埴輪における鋹の表現の画一性の背後にも、このような状況が考えられよう。おそらく、埴輪製作工人の専門化、組織化が進展するに伴ない、表現方法のうえで一種の伝統的規制が生じると同時に、量産という必要上から小型化や表現の簡略化が進んだことが、本論で検討した靱形埴輪の写実性の喪失の最も直接的な要因であると考えられる。

このような状況が顕在化する一つの画期をⅡ式靱形埴輪の出現をみる中期中葉に求めることができよう。さらに注目すべきは、Ⅱ式靱形埴輪の出土が、当時の最大の埴輪生産中枢であったと考えられる古市、百舌鳥両古墳群周辺に集中するという事実である。形象埴輪の生産体制の問題に関してはまだ十分に深い議論がなされる段階には至っていないが、Ⅱ式靱形埴輪に関していえば、埴輪生産の中枢として工人の集中化、組織化がとくに進展していた古市、百舌鳥地域において中期中葉に出現した型式であると推測される。したがって、他地域におけるⅡ式靱形埴輪の動態を把握することは、本論で考えたⅠ式からⅡ式へという靱形埴輪の変遷が他地域でも普遍化できるか否かを決定する手続きであると同時に、他地域の古墳に樹立される埴輪の出自やその生産、流通体制を解明するための糸口となりうるであろう。

後期に入ると、畿内では靱形埴輪の例がきわめて稀になる一方、関東地方を中心に、独自の形態の靱形埴輪がみられるようになる。それらは奴舩形の外形をもち、長頸式の鋹を立体的に表現するという点で、⁽³⁴⁾明らかに畿内における中期の靱形埴輪とは別の系譜に属するものと考えられる。関東地方の靱形埴輪についての詳察は、今回は差し控えるが、それが時期的に先行する畿内のⅡ式靱形埴輪と比べると、再び写実性を取り戻している点が注目される。こうした

点は、今後、いわゆる東国の形象埴輪の成立過程や性格を考えていくうえで、何らかの示唆を与えるものと思われる。

さて、待兼山遺跡出土の靱形埴輪は、北摂地方における靱形埴輪の明確な例としては、大阪府高槻市紅茸山C3号墳の資料⁽³⁵⁾について、わずかに2例目である⁽³⁶⁾。前節でも検討したように、当資料は、古市、百舌鳥地域に集中するⅡ式靱形埴輪と同じ系列に属するものであると考えられ、今後、西摂地域と古市、百舌鳥地域との関係を究明していくうえでの有効な資料となりうるだろう。また、線刻技法の検討については、まだ体系化できる段階ではないが、将来、資料の蓄積がすすめば、形象埴輪の生産体制や流通形態を究明するための糸口となる可能性は十分あろう。

形象埴輪の研究、とくにその出現過程や系譜、編年の問題に関する考察は、円筒埴輪に比べて立ち遅れているといえよう。本論で試みたような作業の積み重ねによって、将来、形象埴輪の諸問題を解明することができれば幸いに思う。

(注)

- 1) 勝部明生「靱形埴輪小考」(『横田健一先生古稀記念 文化史論叢』上巻, 1987年)。
- 2) 川村紀子「埴輪による古墳の編年」(『季刊考古学』第20号, 1987年)。
- 3) たとえば、小林行雄「埴輪」(『陶磁大系』第3巻, 1974年) など。
- 4) 秋山日出雄、網干善教『室大墓』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第18集, 1959年)。
- 5) 京都大学文学部編『京都大学文学部考古学資料目録』2 1968年。
- 6) 勝部明生「靱形埴輪小考」 前掲。
- 7) 野上丈助『大阪府の埴輪』Ⅰ(大阪府立泉北考古資料館改修工事完成記念特別展図録, 1982年)。
- 8) 北野耕平『河内野中古墳の研究』(大阪大学文学部国史研究室研究報告第2冊, 1976年)。
- 9) 野上丈助『大阪府の埴輪』Ⅰ 前掲。
- 10) 末永雅雄、森浩一『河内黒姫山古墳の研究』(大阪府文化財調査報告書第1輯, 1953年)。
- 11) 川口宏海、白神典之、藤下典之「翁橋遺跡発掘調査報告―第1地区―」(堺市文化財調査報告書第18集, 1984年)。
- 12) 野上丈助『大阪府の埴輪』Ⅰ 前掲。
- 13) 笠井敏光、森田和伸他『古市遺跡群V』(羽曳野市埋蔵文化財調査報告書9, 1983年)。なお、これらの資料については笠井、森田両氏の御厚意により実見の機会を得た。
- 14) 野上丈助『大阪府の埴輪』Ⅰ 前掲。
- 15) 第17回埋蔵文化財研究会実行委員会編『形象埴輪の出土状況』(第17回埋蔵文化財研究会資料, 1985年)。
- 16) 調査者によると、主体部副葬遺物は中期中葉的であるが、墳頂部に置かれた須恵器器台が後半から

末葉に属するものであるという。

- 17) 大阪府八尾市萱振1号墳の資料は鉄部周辺を欠失するので、本論では検討の対象としえなかったが、やはり筈部上面を比較的精緻な直弧文で飾り、高さ約180cmを計る大型品であると報告されている。大阪府教育委員会『萱振遺跡現地説明会資料』1983年。
- 18) 都出比呂志氏は梯子状モチーフの表現方法について、縦断面の形態がカタカナの「レ」字状になるものが型式学的に古いことを指摘している。宮山例の梯子状モチーフもこうした形状を呈する。都出比呂志『長法寺南原古墳 III』（大阪大学南原古墳調査団，1985年）。
- 19) 勝部明生「鞍形埴輪小考」前掲。
- 20) 都出比呂志「前期古墳の新古と年代論」（日本考古学会第17回例会講演要旨『考古学雑誌』67巻4号，1982年）。
- 21) 後藤守一『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』1939年。
- 22) 内藤晃、田中稔、佐藤精作、大塚初重『三池平古墳』1961年。
- 23) 伊達宗泰、小島俊次他『メスリ山古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊，1977年）。
- 24) 末永雅雄、島田暁、森浩一『和泉黄金塚古墳』1954年。
- 25) 梅原末治「山城に於ける古式古墳の調査」（『京都府文化財調査報告』第21冊，1955年）。
- 26) ただし、寺戸大塚例や三池平例に代表される、頸部の断面形が扁平な長方形を呈するものと、野中例（図22-9）のような、頸部の断面形が正方形に近い大型品とが、一つの型式学的組列としてつながるものかどうかについては、なお詳細な検討を要する。断面形が正方形に近い頸部を有する鉄鍔（表1左半部-II）は、日本では都出氏による前期IV期前後に急増する。筆者はいわゆる長頸式鉄鍔の祖型をこれらにもとめることができるという展望をもっている。なお本論で試みた鉄鍔の変遷過程の概観については、部分的に見解のこととなるところはあるが、田中晋作氏の論考に啓発される点が多かった。田中晋作「副葬品による編年—武器を中心に—」（『季刊考古学』第10号，1985年）。
- 27) たとえば、兵庫県芦屋市会下山遺跡、大阪府河内長野市大師山遺跡などにこの種の鉄鍔の類例があり、古墳時代前期前半の例としては、京都府椿井大塚山古墳の出土資料などがある。
村川行弘、石野博信、森岡秀人『増補会下山遺跡』1985年。
網干善教他『河内長野大師山—大師山古墳・大師山遺跡発掘調査報告—』（関西大学文学部考古学研究第5冊，1977年）。
近藤義郎他『椿井大塚山古墳』1986年。
- 28) 古墳時代初期の例としては椿井大塚山古墳、長野県松本市弘法山古墳などの資料がある。
斎藤忠他『弘法山古墳』1978年。
- 29) 小林行雄「埴輪」前掲。
- 30) 小林行雄「埴輪」前掲。

- 31) 小林行雄「埴輪」 前掲。
- 32) 勝部明生「靫形埴輪小考」 前掲。
- 33) 上田宏範「埴輪の諸問題」(『世界考古学体系』第3巻 日本III, 1959年)。
- 34) たとえば、神奈川県瀬戸ヶ谷古墳出土例など。
永峯光一、水野正好編『土偶 埴輪』(日本原始美術大系第3巻, 1977年) 図版228。
- 35) 原口正三他『高槻市史』第6巻 考古編, 1973年。
- 36) ただし、豊中市教育委員会柳本照男氏、山元建氏の御教示によれば、同市大石塚古墳、大塚古墳、御獅子塚古墳などにおいて靫形埴輪の一部である可能性がある埴輪片が出土しているという。
その他の参考文献)
 - ・伊東信雄、伊藤玄三『会津大塚山古墳』(会津若松市史別巻, 1964年)。
 - ・網干善教『五条猫塚古墳』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第20冊, 1962年)。
 - ・上田宏範、中村春寿『桜井茶臼山古墳附櫛山古墳』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊, 1961年)。
 - ・小林謙一「弓矢と甲冑の変遷」(『古代史発掘』6 古墳と国家の成立ち, 1975年)。